子どものつまずきや興味を大切にしたアプローチ

英語　堀井　洋一

1　英語における「考える子」

本校英語の目標は「コミュニケーション活動を通して，英語への関心を高め，聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力を培う」である。これは，簡単な英語を使いながらコミュニケーションを図る楽しさや意義，人とかかわる大切さを感じることをねらうものである。

英語では，英語表現を送受信したり他者や異文化について触れた内容を解釈したりする時に「考える」行為を行う。子どもは，英語表現や内容を理解する過程で「分からない。」「なんと言っているか。」といったつまずきや興味をもった時に，その対象について深く考えようとするのである。「考える」行為は，より豊かな英語表現の獲得や深い他者理解・異文化理解につながるものである。

このことから，英語では次の３点を「考える」と定義し，英語における「考える子」を以下のようにとらえる。

① これまでに触れたことのない表現を予想・理解しようとすること。（新たな表現の認識）
② 伝えたいことが伝わるように表現を獲得・選択して活用しようすること。（表現の選択）
③ 英語でのやりとりを通して，他者や異文化について思いをもとうとすること。（他者理解）

使える英語表現を選択・活用して　コミュニケーションを繰り返すことにより　新たな英語表現に気付き　他者や異文化に対して思いをもとうとする子

2　問いがつながる英語の授業

英語における「問い」とは，英語表現や他者や異文化への興味から生まれる疑問である。

子どもは，英語でのコミュニケーションを通して，英語表現や相手が伝えようとする内容，自他の違いに興味や疑問をもつ。

新しい英語表現に触れて「分からない。」「伝えられない。」と感じる中で，「どういう意味か。」「どう言えばいいのか。」という「問い」が子どもの中に生まれる。そして，その「問い」を他に伝えることで，互いが知っている表現を出し合いながら協力して解決する。こうして子どもは，英語表現を活用したコミュニケーションを通して，新たな英語表現や他者理解の深まり・拡がりを実感する。これが「分かった。」「もっと知りたい。」という喜びや意欲へとつながるのである。

このように，子どもが「問い」を起点に気付きや思いをもつ授業が，英語における「問いがつながる授業」である。

3　「問いがつながる授業」への手だて

(1)　考えながら聞かせる（効果的な Input）

子どもが英語でのコミュニケーションを楽しむためには，ある程度，英語表現に十分に触れ，慣れている必要がある。子どもがこれまで触れたことのない新しい表現を織り交ぜて Input することで，表現方法や内容について興味をもたせ「問い」へとつなげる。理解しようと考えながら聞くことは，英語表現への慣れに有効である。

(2)　内容の精選や学習形態を工夫する（他者・異文化理解につながるコミュニケーション）

「問い」が生まれ，つながっていくには，他への関心が不可欠である。そこで，コミュニケーション活動で扱う内容を他者・異文化理解に関するものとし，自他の違いを意識させる。また，協同学習やタスク活動を取り入れることで「言いたい」「知りたい」という意欲を喚起し，「問い」を伝え合い共有する中で互いの考えを深めさせる。

(3)　気付きや思いを意識させる（ふりかえりの視点）

子どもが新たな「問い」や意欲をもち考えるには，自分自身の気付きや思いを明確にすることが必要となる。そこで，学習のねらいにそった視点でふりかえりをして，分かったことと分からないことを意識させるためにワークシートやシェアリングを取り入れるとともにその形式を工夫する。

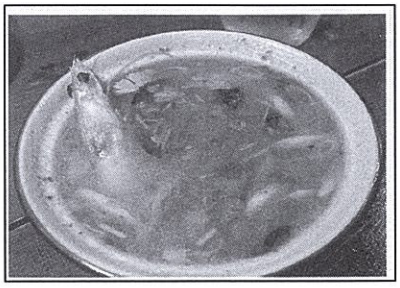
4　実践例

６年生の実践「レストランに行こう“What would you like ?”」をもとに，「問いがつながる授業」への手だてと「考える子」について述べる。

(1)　考えながら聞かせる（効果的な Input）

視覚情報の活用「外国の料理クイズ」

外国の食文化に興味をもちながら料理名を表す英語表現に触れさせるため，写真を提示してどの国の料理かを考えるクイズを取り入れた（資料１）。

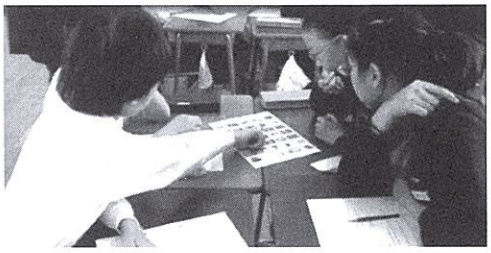


資料１　料理クイズのカード

子どもは，グループで相談しながらどの国の料理かを考えていた。Pizza や Paella など日本でも比較的馴染みのある料理に対しては簡単に答えを出すことができていたが，Kebab や Brusch など見たことはあっても，どこの国の料理か分からない問題について，写真を見ながら「あの肉のかたまりは，見たことあるけどどうやって食べるの。」「スープかな。」「シチューじゃないか。」といった問いをもっていた。Tom yum goong や Pot-au-feu の問題では，ALT が写真を指しながら shrimp, carrot, onion といった単語を聞かせたことで，一方は魚介類，もう一方は野菜が中心のスープであることに気付き，「shrimp はエビか。海のある国かな。」「野菜をたくさん食べる国ってどこ。」といった疑問を出しながら聞いていた。写真の活用により，視覚情報と音声情報とを考え合わせることができ新しい英語表現に抵抗なく触れることができていた。

質問をもとに答えを予想する活動「先生の選んだメニューあてクイズ」

＜先生の選んだメニューは何か＞では，ALT が選んだメニューを予想する活動を行った。子どもは，どのような質問をすれば先生の選んだメニューを絞り込めるかグループで相談して，色や味，国などヒントになることを選んでいた（資料２）。



資料２　ALT への質問をグループで相談している様子

また，考えた質問を英語で尋ねるにはどんな表現を使えばよいか相談して，知っている言語形式や単語を使って質問を決めていた。

質問タイムで，子どもは“What country?”，“What color ?”，“Can you drink シュワシュワ?”，“Do you like fish or beef ?”，“Hot or cold?” など答えを絞り込むための質問をした。

“What country?” では ALT の答えを聞く際に Germany を Jamaica と聞き取ってしまい“Jamaica？”と聞き返していた。その後，ALT がもう一度，Germany と発音したのを聞き取ることができた。「分からない」「分かりたい」という気持ちで聞こうとしていたことで，正確に聞き取ることができたと考えられる。

また，英語での表現が分からず，“Can you drink シュワシュワ?” と日本語混じりで質問したＡ児に対して，ALT が「あわだつ」という意味の fizzy という単語を聞かせた。これにより，シュワシュワをどう言えばいいか分からなかった他の子どもも fizzy という表現を理解して使えるようになった。よく聞き取れなかった表現や言い方が分からなかった表現を改めて聞くことは英語表現への気付きに有効である。

この活動で子どもは，どのような質問や英語表現が適切かという点について問いをもち，メニューの予想を考えることができていた。また，質問に対する ALT の応答をクイズに正解したいという意欲から，何とか聞き取ろうとする積極的な態度が見られた。意欲や疑問をもって聞き取ろうとすることができれば，より効果的に英語表現の獲得ができると言える。

⑵　内容の精選や学習形態を工夫する（他者・異文化理解につながるコミュニケーション）

内容の精選「真のコミュニケーション活動」

“What would you like ?”の表現に慣れる学習では，レストランでの注文の場面を設定した。子どもは，店員と客に分かれて，互いに食べたいものを質問し合った（資料３）。客役の子どもが，メニューの中から本当に食べてみたいものを選んで注文することで，やりとりを通して相手の好きな食べ物に興味を持つことをねらった。活動後には「みんないろいろなものが好きでおもしろいなと思いました。女子にも聞いて何がほしいか知りたいです。」「(料理の）組み合わせが同じ人がいておもしろかった。」といった思いが聞かれた。

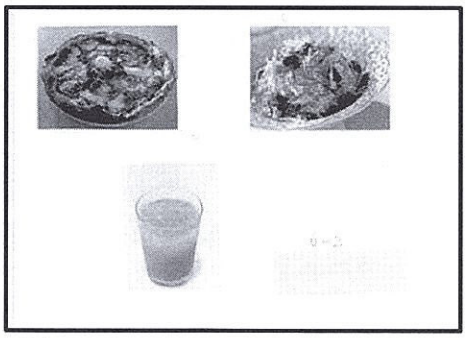
資料３　役割分担をして，自分の食べたいものを注文している様子

この活動では，音声のみでのやりとりにしたため聞き取れない場合には，もう一度聞き返す必要があった。このことで，子どもは，自分が英語を聞き取れていたかどうかを意識することができた。「Would の発音が分からなかった。」や「注文の取り方を間違えたときに言い直すことができた。また注文を聞いてみたい。」といった表現へのつまずきから次の学習への意欲が生まれた。

内容を真のコミュニケーションにすることにより，「聞きたい」という意欲が増し，「自分と同じなのか，違うのか」といった問いをもちながら自他を比較し理解しようとする姿が見られた。

学習形態の工夫「グループによるショウ・アンド・テル」

単元の最後には，自分が注文したメニューをカード（資料４）で見せながら紹介する活動を行った。この活動では，友達のプレゼンテーションを聞きながら自分の好きなメニューと比較して，他者理解することを目指した。



資料４　ショウ・アンド・テルで使用したメニューカード

自分が選んだ料理とその理由について考えさせていたため，友達に対する質問のほとんどが「なぜそれを選んだのか。」であった。コミュニケーションで扱った内容が共通していたことで，自他の理由を比較することはできていた。その反面，「どんな種類のスパゲッティが好きか。」など興味の広がりや詳しく聞こうとする意欲の深まりが弱かった。

資料５　電子辞書を使って単語を調べている様子

発表の準備をグループでの活動とした。分からない表現や語彙を調べるために電子辞書を活用したり友達や ALT に質問したりしていた（資料５）。

「カリカリした食感が好き」という表現が分からず苦労していたＢ児は「カリカリ」を調べていたが英語表現を見つけることができなかった。また，ALT に聞いたが ALT が「カリカリ」という日本語を理解できず英語表現を教えることができなかった。そこでＢ児はグループのメンバーに「カリカリってどういうの。」という問いを発した。他の子どもも言い方が分からず困惑していたが，Ｃ児がピザの生地から推測して「crispy じゃないかな。」と答えていた。それを聞い

て，B児はcrispyという単語を使って“I like crispy pizza.”と言うことができていた。自分の問いを友達に伝えることで，問いを共有し解決することができた。

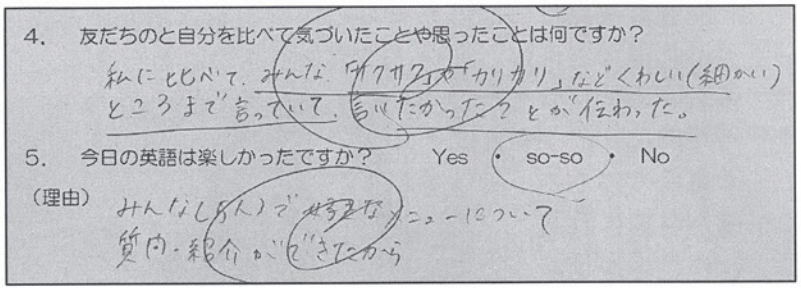
グループを活用した協同学習により，子どもは表現が分からない場合に，どう言えばいいかをグループのメンバーに質問して解決することができていた。

(3) ふりかえりの視点「気付きや思いを意識させる」

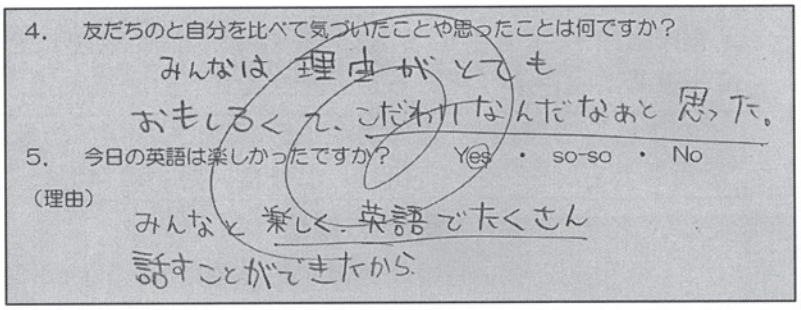
ワークシートによるふりかえりの工夫

活動後には，ワークシートを使用してふりかえりを行った。友達と自分のメニューを比べて気付きや思いを記入することで自他の比較からの他者理解・自己理解をねらった。

記されていたこととして大きく次の二つに分別することができた。一つ目は英語表現に関するもの，二つ目は友達の好みに関するものである。D児は，自分が紹介した表現と友達が使った表現とを比較し，友達が食べ物の食感を言っていることで言いたいことが伝わることに気付いていた（資料６）。また，E児は選んだ料理が同じでもその理由は人それぞれこだわりがあることを面白いと感じていた（資料７）。友達と自分とを比較するという視点を与えることで，分かったことを明確にすることができた。また，D児，E児とも，その日の学習を楽しいとふり返っている。その理由として「みんなで質問・紹介ができたから。」「みんなと楽しく話すことができたから。」と答えている。


4. 友だちのと自分を比べて気づいたことや思ったことは何ですか？
私にくらべて，みんな「サクサクとか」「カリカリ」などくわしい（細かい）ところまで言っていて，言いたかったことが伝わった。
5. 今日の英語は楽しかったですか？ Yes ・ so-so ・ No
（理由）みんなと（人）で好きなメニューについて質問・紹介ができたから

資料６　食べ物の食感を表わす英語表現についての気付き（D児）


4. 友だちのと自分を比べて気づいたことや思ったことは何ですか？
みんなは理由がとても
おもしろくて，こだわりなんだなぁと思った。
5. 今日の英語は楽しかったですか？ Yes ・ so-so ・ No
（理由）
みんなと楽しく，英語でたくさん
話すことができたから

資料７　友達の好みの理由についての思い（E児）

このことから，新たな英語表現への気付きや他者への思いを明確にし，深まり・拡がりを実感することで，英語でのコミュニケーションの楽しさを味わうことができると言える。

5　今後に向けて

(1) 効果的な Input（考えさせながら聞かせる）

英語表現の Input では，クイズを取り入れる中で新たな英語表現を子どもに提示した。英語や他の言語と触れることにより発音の特徴に違いがあることを感じながら聞くことができた。クイズ以外の方法でも表現方法や内容に着目させる活動を取り入れることで問いを生み，「考える」行為へとつなげていくことができることを探っていきたい。

(2) 内容の精選や学習形態を工夫する（他者・異文化理解につながるコミュニケーション）

本単元では，タスクを通して意味のあるコミュニケーションを取り入れた。「伝えたい」「知りたい」という思いが伴っていたため，いろいろな表現を使って言いたいことを伝えようとする姿が見られた。問いを伝え合い，相互作用のあるコミュニケーションを行うために，今後も協同学習やタスク活動を取り入れていくことが有効である。

(3) ふりかえりの視点（気付きや思いを意識させる）

本時のねらいに沿った視点での記述によるふりかえりを継続してきた。子どもが気付きや思いを認識し英語を学ぶ楽しさを実感するうえでも有効である。今後は，シェアリングを充実させて，互いの気付きや思いを共有することで，さらなる問いや意欲をねらいたい。